

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：34415

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K18692

研究課題名（和文）エピソード記憶の特性と機能に関する複合的アプローチ：ノスタルジア・心理的幸福感

研究課題名（英文）A multifaceted approach to the properties and functions of episodic memory: nostalgia and psychological well-being.

研究代表者

川口 潤（KAWAGUCHI, Jun）

追手門学院大学・心理学部・教授

研究者番号：70152931

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、人間が持っている記憶、特に自分自身の体験の記憶であるエピソード記憶について、近年の記憶心理学を中心とした理論的発展、実証的知見の蓄積を元に、それが人間の幸福感を支える基礎的な心理メカニズムとして機能していることを明らかにしようとした研究である。特に、エピソード記憶の重要な特徴がありありと再体験するように詳細な記憶を想起すること、また過去の想起と未来の展望が関連しているということから、再体験的想起の典型のひとつであるなつかしい記憶想起に焦点を当て、検討を行った。その結果、なつかしい記憶の想起は主観的幸福感および時間割引率と関連している可能性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はこれまでの認知研究におけるエピソード記憶の働きについて、単に「覚え、想起する」といったこれまでの記憶研究の枠組みにとらわれず、未来の報酬の評価（時間割引）や主観的幸福感との関連など、広く心の働きと深く関係していることを示すものとして、隣接領域にも関連していること、また、最近のエピソード記憶概念の変化という国際的研究動向と深く関わるものであり、学術的意義は大きいと考える。さらに、詳細なエピソード記憶想起が幸福感や未来展望と関連していることから、将来展望をもちにくい状態の改善にも寄与する可能性があり、社会的意義も大きい。

研究成果の概要（英文）：This study attempted to clarify that human memory, especially episodic memory, which is the memory of one's own experiences, functions as a basic psychological mechanism that supports human well-being, based on the accumulation of theoretical developments and empirical findings in recent years, mainly in the field of psychology of memory. In particular, because a critical feature of episodic memory is the recalling of detailed memories as if re-experiencing them vividly, and because recalling the past is related to the prospect of the future, we focused our study on nostalgic memory recall, which is one of the typical types of re-experiential recall. The results showed that nostalgic memory recall may be related to subjective well-being and the time discount rate.

研究分野：認知心理学

キーワード：エピソード記憶 なつかしさ ノスタルジア 幸福感 自伝的記憶 時間割引 認知心理学 認知科学

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、心理学分野においてエピソード記憶として分類されている記憶について、その働きや機能を新たな視点から解明しようとしたものである。

認知心理学分野では、2010年代に入って、エピソード記憶がどのような機能を果たしているかについての新しい知見が積み重ねられつつあった。その頃の一般的なエピソード記憶の定義は（そして現在でも教科書的にはこのように記載されていることが多いが）、時間、空間情報の付随した自分の体験の記憶と定義されていた(Tulving, 1972; 自伝的記憶(autobiographical memory)もほぼ同様の概念であるがそれらの違いについてはここでは触れない)。しかしその後、エピソード記憶が持つ重要な特徴として過去の出来事を再体験するかのように思い出す意識体験(mental time travel; 自己内省的意識, auto-noetic consciousness)が重要であると考えられるようになった(e.g., Suddendorf, 2013; Tulving, 2005, 2006)。このことこそが、人間が他の動物種と異なる大きな特徴であるという主張であり、エピソード記憶概念が変化しつつあった点である。

また、エピソード記憶は基本的に「過去」の体験の記憶であるとされるが、このような過去を想起するというエピソード記憶を支えている記憶システムは、「未来」を想像するという心理機能をも支えているのではないかという主張がなされるようになってきた。この未来を想像する能力に関する考え方はすでに Tulving (2001) でも述べられているが、その後、過去の想起と未来の想像が類似した現象を示すこと（たとえば、エピソード記憶障害を持つ健忘症患者は未来の詳細な想像が困難；e.g., Schacter & Addis, 2007; Rösch, Stramaccia, & Benoit, 2021）や過去の想起時と未来の想像時の神経基盤が重複しているという知見が示されるようになり（e.g., Schacter, Benoit, & Szpunar, 2017）、エピソード記憶の概念が変わりつつあった。すなわち、エピソード記憶は過去の出来事の記憶とその想起であるという定義から、再体験するかのように詳細に想起すること、またそれに伴った想起意識の重要性が指摘されたこと、さらに過去の想起は未来の想像能力と深く関わっていると考えられるようになって来ていた。

そこで申請者は、このようなエピソード記憶の特徴、たとえば「過去をありありと思い出す」(mental time travel)といった特徴が最も表れている状況として、なつかしい記憶の想起に着目した。これまですでになつかしさ(nostalgia)に関する研究を進めつつあったが、ここに至って、単に「なつかしい」という感情を扱うのではなく、「なつかしさ」、「なつかしい記憶」をエピソード記憶の大きな特徴として調べることが、「なつかしさ」という感情の検討だけでなく、エピソード記憶という人間特有の可能性が考えられるものの解明にとって重要であると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、人間が持っている記憶、特に自分自身の体験の記憶であるエピソード記憶について、近年の記憶心理学を中心とした理論的發展、実証的知見の蓄積を元に、その特徴と機能を明らかにすることを目的とした。ただし、エピソード記憶が単に人間の認知機能の一つであるとする従来のアプローチではなく、広く様々な心理機能の基盤をなしているという視点から捉えようとするものであり、中でも幸福感を支える基礎となっているのではないかという点に着目した。

すでに上記で述べたように、エピソード記憶が持つ重要な特徴として自分自身の体験の記憶、すなわちエピソード記憶については、単に記憶成績がよい悪いにとどまらず、心理的な過去と未来をつなぐ重要な役割を果たしていることが見いだされてきた。過去の想起と未来の想像が共通の基盤を有していること(e.g., Schacter, Benoit, & Szpunar, 2017)に加えて、さらにエピソード記憶は、問題解決のプランニングへの影響、心理的幸福感といった心の健康にも関わっていることが示唆されている(Jing, Madore, & Schacter, 2016)。本研究はその点にも焦点を当てることとした。

さらに、エピソード記憶の想起が単純な想起の出来・不出来(記憶の正解・不正解)という典型的な記憶指標ではなく、想起時の意識、すなわち自己内省的意識(auto-noetic consciousness)が重要という観点から、想起の状態に着目することとした。近年、非常によく使われるようになってきている手法が、Autobiographical Interview (Levine et al., 2001)という手法である。この手法自体は2001年に発表されたものであるが、2010年前後以降のエピソード記憶研究ではしばしば利用されている。Autobiographical Interviewは、エピソード記憶の想起内容がどれくらい詳細であるかを定量化する方法であり、本研究でもその日本語版作成を試みた。

これらのエピソード記憶に関する最新の研究を踏まえ、本研究ではその最大の特徴である過去の出来事を再体験するかのように思い出す典型的な状態(mental time travel)としてなつかしい記憶の想起という場面を取り上げ、

- (1) なつかしさ想起を実験的に作り上げることによって、エピソード記憶の再体験的想起が持つ特徴を明らかにする
- (2) なつかしい記憶の想起が幸福感などのいわゆる記憶指標以外のさまざまな心理機能に与える影響を解明する

という点を中心に検討することを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究では、なつかしい記憶想起という手法を用い、エピソード記憶が関与していると考えられる特徴への影響を検討することとした。主に実験的手法を想定していたが、コロナ禍による個人実験実施の困難という状況に遭遇し、Web 実験や質問紙を用いる手法も検討した。加えて、幸福感については当該分野で主に用いられている質問紙による検討を行った。

上記で述べたように、エピソード記憶の重要な点は、自分自身の体験を再体験するかのよう思い出すという点である。これはエピソード記憶の再体験的想起(mental time travel; Tulving, 2005)と呼ばれているが、この再体験的想起について、近年、その能力は情景(scene)をひとまとまりのものとして想起できるか(scene construction)どうかに関与していることが明らかとなってきた(e.g., Hassabis & Maguire, 2007)。たとえば、健忘症患者は個別のアイテムを想起、イメージできるが、それらをまとめた情景は想起、イメージできない(e.g., Maguire, Intraub, & Mullally, 2016)。本研究ではこの点に着目し、scene construction 能力を反映しているとされる境界拡張(boundary extension; Intraub, & Bodamer, 1993)という現象を用いた実験的検討を行うこととしていたが、コロナ禍に入り個別実験ができなかったため、これまで取得したデータの鮮明度(vividness)、視覚イメージ能力との関連を検討することとした。もちろん、scene construction と vividness、視覚イメージ能力は同一のものではないが、間接的な関連があることを前提とした。

エピソード記憶想起の指標として、再生数、再生率がよく用いられるが、すでに述べた Autobiographical Interview では、想起内容の詳細さを調べることによって、エピソード記憶能力を検討している。具体的には、一般的知識(意味記憶)にもとづく推論的想起ではなく、イベント特有の情報をどれくらい想起しているかを調べる手法である。日本ではほとんど使われておらず、本研究ではこの手法の日本語版開発も視野に入れて検討を行った。

また、エピソード記憶が過去の想起にとどまらず未来の展望に深く関わっているという知見をもとに、典型的な主観的想起体験を伴うと考えられるなつかしい記憶想起は、詳細な再体験感を伴うエピソード記憶想起と類似した機能を持つのではないかと考えられる。そこで、近年エピソードの未来思考(episodic future thinking)研究で用いられる手法の一つである、遅延割引課題(delay discounting task)を用いることとした。遅延割引課題とは、将来の心理的価値を現在の価値に置き換えるとどの程度と推定するかを測定する課題である。なつかしい記憶想起による未来の価値の割引の程度を測定することによって、未来をどのように捉えているかを測定しようとした。

これらの研究におけるなつかしい記憶想起方法については、参加者になつかしい出来事の想起あるいは日常的な出来事の想起を求め、その後、課題を実施するという手法を主に用いた。

### 4. 研究成果

本研究は、エピソード記憶の特徴と機能を近年の知見をもとに明らかにしようとしたものであり、その手法としてなつかしい記憶想起を用いた。ただ、コロナ禍により実験室実験が困難となったことから、オンライン質問やこれまでのデータのまとめなどを中心として行うこととなった。

なつかしい記憶の反復想起が幸福感に与える影響を検討した。なつかしい記憶想起手法は、Sedikides et al. (2016)による手法に基づいており、参加者になつかしい記憶を一つ、できるだけ詳細に思い出してもらおうという手法である。この手法によりなつかしい記憶想起の与える影響が示されて来ており、たとえば、ポジティブ感情の増加(Wildschut et al., 2006)、社会的つながり感の増加(Sedikides et al., 2016)、自己連続性感の増加 (Sedikides et al., 2016)、主観的幸福感の向上(Sedikides et al., 2016)、自尊感情の向上 (Hepper et al., 2012)、楽観性の向上(Cheung et al., 2016)などが知られている。

これらは1回のなつかしい記憶想起の効果を検討したものであるが、本研究では、持続的に反復して想起した場合の効果を検討した。これは、日常場面におけるなつかしい記憶想起の効果を調べようとしたものであり、従属変数として主観的幸福感を測定した。ここで用いた主観的幸福感は Sedikides et al.(2016)が用いたものと同様であり、Ryan & Frederick(1997)による主観的幸福感質問項目を用いた。この質問紙は「生き生きとして活気がある」などの、主として活動性を中心に尋ねる項目であった。参加者は大学生であり、なつかしい記憶想起群と日常記憶想起群の2群を設けた。前者ではなつかしい記憶の想起、後者では日常的な出来事の想起を求めた。参加者は1週間、毎日これらの記憶の想起を行った。また、記憶想起前、1週間の想起後、2週間後(2週目は記憶想起を行っていない)に主観的幸福感の測定を行った。その結果、なつかしい記憶想起群において、記憶想起前に比べて1週間後、2週間後の主観的幸福感が増加した。

ここで調べた主観的幸福感は活力度を主に尋ねており、いわゆる「西洋的」幸福感を反映したものと考えられる。日本人では、自己の活力度というより他者との関わりが幸福感の特徴であるという指摘があることから、協調的幸福感尺度 (Hitokoto & Uchida, 2015)を用いて同様の実験を行った。質問項目は、「まわりの人に認められていると感じる」など9項目であった。本研究はオンライン調査という手法で行なった。参加者は18歳から66歳の日本人であり、オンライン上でなつかしい記憶の想起、あるいは日常的出来事の想起を行ってもらい、その後、協調的幸福感に関する質問紙への回答を求めた。本研究では調査手法の制約などから、1回の記憶想起の効果を検討した。その結果、記憶想起の種類による効果は見られず、年齢の効果(高齢者の方が協調的幸福感が高い)のみが見られた。

さらに、高齢者を対象に1週間の記憶想起の効果を検討した。65歳以上の高齢者59名をなつかしい記憶想起群と日常的出来事想起群の2群に分けて、1週間毎日記憶を想起してもらい、主観的幸福感 (Ryan & Frederick, 1997) を測定する実験を行った。その結果、なつかしい記憶想起群と日常的記憶想起群の2群で幸福感の違いは有意ではなかった。これは、なつかしい記憶を想起することは高齢者では効果がないことを示していると考えられる。ただし、大学生を対象とした場合は、幸福感の初期値が中程度であったのに対し (8段階評定で4.7)、高齢者では最初の段階である程度幸福感が高く (8段階評定で5.6)、いわゆる天井効果であった可能性もある。高齢者参加者は健康な人を募集したが、大学で実験を受ける人を募集した時点で、ある程度心身ともに健康ですでに主観的幸福感の高い参加者が集まった可能性がある。このことから、高齢者に関する幸福感の向上は引き続き検討課題である。

エピソード記憶の詳細な想起は未来の詳細な展望と関連しており、未来を詳細に想像することによって衝動性が低下する (未来を待てる) 可能性が、遅延割引課題 (未来の報酬と現在の報酬を比較する課題; Peters & Büchel, 2010) を用いた研究で示唆されている (e.g., Peck & Madden, 2022; Wu, et al., 2017)。このことからなつかしい記憶想起が遅延割引課題に与える影響について検討を行った。参加者は大学生であり、なつかしい記憶想起条件と日常記憶想起条件の2条件を設けた。参加者は、なつかしい記憶あるいは日常の出来事の想起を求められた後、遅延割引課題を行った。遅延割引課題は Koffarnus & Bickel (2014) による、5 試行で遅延割引率を推定する手法を用いた。また、視覚イメージ能力との関連を検討するために、VVIQ (Vividness of Visual Imagery Questionnaire; Marks, 1973) を実施した。その結果、遅延割引率 ( $\log k$ ) は、なつかしい記憶想起条件の方が日常記憶想起条件より小さくなった。このことは、なつかしい記憶を想起した方が未来の価値の低下が少なく報酬を待つことができることを示している。また、遅延割引率と視覚イメージ能力の関連を検討するために、遅延割引率と VVIQ 得点の相関を求めたところ、なつかしい記憶想起条件においてのみ両者の相関がみられた。このことは、視覚イメージ能力の高低はなつかしい記憶想起における遅延割引率の大小に関連しており、視覚イメージ能力の高い人は遅延割引率が小さくなることを示している。

さらに、なつかしい記憶想起は社会的つながり、孤独感と関係していることが指摘されているが、人は孤独感を感じた時に、身の回りの事物を擬人化することで、孤独感を紛らわせることがある。そこで、なつかしさが擬人化とどのように関連しているかを検討した。その結果、なつかしい記憶を想起することと馴染みのない対象の擬人化が関連していることを見出した (Nakamura & Kawaguchi, 2023)。そのメカニズムについては検討中である。

これまで進めて来た研究はオンラインを含めた実験あるいは調査であったが、基本的に数値化可能な指標を用いてきた。最初に述べたように、最近のエピソード記憶研究においては想起時の意識状態、具体的にはどれくらい詳細に思い出しているかが重要だとされており、想起内容のテキスト分析が行われている。本研究では十分にその手法を用いて想起内容の分析をすることまではできなかったが、現在、その手法の日本語版を開発中である。この手法は、1回きりの体験である出来事をどの程度詳細に想起しているかを定量化しようとするものである。つまり、意味記憶による推論が含まれた想起内容と区別することで、エピソード記憶らしい特徴を取り出す手法である。テキストのコーディングに難しさがあるが、原著者からも理解を得て進めており、まともな次第発表予定である。記憶想起のテキストデータを定量的に分析する研究は少なく、この手法の開発が、心理学にとどまらず幅広い記憶研究を進めることに役立つことを願っている次第である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 16件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Nakamura Hiroko, Kawaguchi Jun	4. 巻 13
2. 論文標題 Effect of Nostalgic Memory Retrieval on Anthropomorphism	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 SAGE Open	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/21582440231220492	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 伊藤友一・松本昇・小林正法・西山慧・三好清文・村山航・川口潤	4. 巻 20
2. 論文標題 エピソード科学：記憶研究の新たな視点	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 認知心理学研究	6. 最初と最後の頁 43～56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5265/jcogpsy.20.43	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Matsumoto Noboru, Katahira Kentaro, Kawaguchi Jun	4. 巻 47
2. 論文標題 Cognitive Reactivity Amplifies the Activation and Development of Negative Self-schema: A Revised Mnemic Neglect Paradigm and Computational Modelling	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Cognitive Therapy and Research	6. 最初と最後の頁 38～51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s10608-022-10332-x	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Matsumoto Noboru, Kobayashi Masanori, Takano Keisuke, Lee Michael D.	4. 巻 127
2. 論文標題 Autobiographical memory specificity and mnemonic discrimination	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Memory and Language	6. 最初と最後の頁 104366～104366
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jml.2022.104366	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Matsumoto Noboru, Watson Lynn Ann, Fujino Masahiro, Ito Yuichi, Kobayashi Masanori	4. 巻 50
2. 論文標題 Subjective judgments on direct and generative retrieval of autobiographical memory: The role of interoceptive sensibility and emotion	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Memory & Cognition	6. 最初と最後の頁 1644 ~ 1663
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3758/s13421-022-01280-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 楠見孝・川口潤	4. 巻 64
2. 論文標題 特集：なつかしさの認知・神経基盤と機能	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 1-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林正法	4. 巻 64
2. 論文標題 懐かしさの喚起：喚起法，測定，個人差	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 115 - 130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大杉尚之・小林正法	4. 巻 19
2. 論文標題 GUIベースのweb実験作成ツール ( lab.js ) の紹介と実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 認知心理学研究	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林正法	4. 巻 40
2. 論文標題 lab.js BuilderによるGUIベースのオンライン心理学実験の作成	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 基礎心理学研究	6. 最初と最後の頁 10-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 豊田雪乃・小林正法・大竹恵子	4. 巻 92
2. 論文標題 援助想像が援助意図に及ぼす影響 - イラスト刺激と文章刺激の比較 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 111 ~ 121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.92.20002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Matsumoto Noboru, Mochizuki Satoshi, Marsh Laura, Kawaguchi Jun	4. 巻 150
2. 論文標題 Repeated retrieval of generalized memories can impair specific autobiographical recall: A retrieval induced forgetting account.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Experimental Psychology: General	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1037/xge0001028	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Matsumoto Noboru, Takahashi Yoshifumi, Kawaguchi Jun	4. 巻 44
2. 論文標題 Increased Direct Retrieval of Overgeneral Categorical Memory in Individuals with Dysphoria and a History of Major Depression	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Cognitive Therapy and Research	6. 最初と最後の頁 483 ~ 498
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s10608-020-10079-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Matsumoto Noboru, Kawaguchi Jun	4. 巻 68
2. 論文標題 Negative item memory and associative memory: Influences of working memory capacity, anxiety sensitivity, and looming cognition	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry	6. 最初と最後の頁 101569 ~ 101569
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jbtep.2020.101569	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ito, Y., Terasawa, Y., Umeda, S., & Kawaguchi, J.	4. 巻 10,
2. 論文標題 Spontaneous Activation of Event Details in Episodic Future Simulation.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology,	6. 最初と最後の頁 625
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2019.00625	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計32件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 11件)

1. 発表者名 長井美友貴・伊藤友一・松本昇・川口潤
2. 発表標題 共同でのエピソード的未來思考 予備的検討
3. 学会等名 日本認知心理学会第21回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 波多野文・後藤伸彦・紀ノ定保礼・川口潤
2. 発表標題 オンライン心理学実験の展開
3. 学会等名 山形大学人文社会科学部附属安心安全価値創造研究所・講演会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 小林正法
2. 発表標題 指示忘却による食物評価の低下（話題提供；記憶研究の基礎と応用を考える）
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小林正法
2. 発表標題 指定討論（未来を想像して，動機づけを高める）
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hiroko Nakamura & Yoshimasa Majima
2. 発表標題 Relationship between teleological belief, anthropomorphism and construal level in Japanese
3. 学会等名 The 9th International Conference on Thinking（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林正法
2. 発表標題 テクノロジーとエピソード記憶
3. 学会等名 第19回日本認知心理学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大杉尚之・小林正法
2. 発表標題 “ ヒト ” のこころをスマホのブラウザで測ってみよう！
3. 学会等名 2021年度 日本基礎心理学会公開シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林正法・国里愛彦・大杉尚之・西山慧・紀ノ定保礼・遠山朝子
2. 発表標題 はじめての オンライン心理学実験・調査： jsPsychとlab.jsを用いた作成
3. 学会等名 第85回日本心理学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Matstumoto, N., & Kobayashi, M.
2. 発表標題 Autobiographical memory specificity and mnemonic discrimination
3. 学会等名 Autobiographical Memory & Psychopathology Meeting ( 国際学会 )
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小國龍治・大竹恵子
2. 発表標題 感謝が向社会的行動を促進する動機づけ過程の検討.
3. 学会等名 日本健康心理学会第34回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 末角唯仁・大竹恵子
2. 発表標題 制御焦点とプロセスフィードバックが動機づけと感情に及ぼす影響
3. 学会等名 日本健康心理学会第34回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 豊田雪乃・大竹恵子
2. 発表標題 感情に焦点を当てると援助想像の鮮明さは高まるのか.
3. 学会等名 日本健康心理学会第33回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大竹恵子
2. 発表標題 公募シンポジウム44 Compassion-Based Approach の核と個性
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kawaguchi, J.
2. 発表標題 Nostalgia: A new window into episodic memory research.
3. 学会等名 Network Meeting on Experimental Psychopathology (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kawaguchi, J. & Nakamura, H.
2. 発表標題 Remembering autobiographical memory and nostalgia: The function of nostalgia and mental time travel
3. 学会等名 Special Interest Meeting in Autobiographical Memory and Psychopathology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kawaguchi, J. & Nakamura, H.
2. 発表標題 Remembering memories with nostalgia: Functions of nostalgia and its influence on human well-being.
3. 学会等名 The 1st Meeting of the Applying Neuroscience to Business. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Matsumoto, N., Takahashi, Y., & Kawaguchi, J.
2. 発表標題 Increasing the direct retrieval of overgeneral categoric memory in depression.
3. 学会等名 the 9th World Congress of Behavioural & Cognitive Therapies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小川喬史・北神慎司・川口潤
2. 発表標題 歴史的ノスタルジアを喚起する風景画像
3. 学会等名 日本認知心理学会第17回大会.
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kobayashi, M., Oguni, R., & Otake, K.
2. 発表標題 Anticipated warm-glow and guilt increase the intention to help a person in need in episodic simulation.
3. 学会等名 21st Conference of the European Society for Cognitive Psychology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kobayashi, M. & Otake, K.
2. 発表標題 Implicit and explicit attitudes toward passive smoking in subtypes of non-smokers
3. 学会等名 13th Biennial Asian Association of Social Psychology Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林正法・大竹恵子・井上和哉
2. 発表標題 食物画像評価データベースの作成：日本食を中心に
3. 学会等名 日本基礎心理学会第38回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林正法・小國龍治・大竹恵子
2. 発表標題 予期Warm-glow及び予期罪悪感は援助行動意図と正に関連する,
3. 学会等名 第83回日本心理学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林正法・小國龍治・大竹恵子
2. 発表標題 「助ける」想像と「助けない」想像が援助行動意図に与える影響,
3. 学会等名 日本認知心理学会第17回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kawaguchi, J., Nakamura, H., & Suzuki, A.
2. 発表標題 Remembering episodic memory with nostalgia influences delay discounting
3. 学会等名 the 3rd Psychonomics International meeting (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kawaguchi, J., Nakamura, H., & Suzuki, A.
2. 発表標題 Remembering episodic memory with nostalgia and delay discounting: Its relation to individual difference of visual imagery
3. 学会等名 International Conference on Autobiographical Memory and the Self. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kawaguchi, J., & Nakamura, H.
2. 発表標題 Remembering the past and imagining the future
3. 学会等名 the 59th Annual Meeting of the Psychonomic Society. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川口潤
2. 発表標題 エピソード記憶の新展開
3. 学会等名 日本認知心理学会第16回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川口潤・中村紘子・鈴木彩華
2. 発表標題 なつかしい記憶を思い出すと待てる - なつかしい記憶想起を伴う時間割引課題における視覚的イメージ能力の検討 -
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松本昇・川口潤
2. 発表標題 大うつ病エピソード経験者にみられるネガティブな概括化スキーマ
3. 学会等名 日本うつ病学会第15回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川口潤・中村紘子
2. 発表標題 なつかしい記憶を思い出すと待てる？ - なつかしさをともなうエピソード記憶想起が時間割引に及ぼす効果 -
3. 学会等名 日本認知心理学会第16回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 大竹恵子、内山 伊知郎、中村 真、武藤 世良、大平 英樹、樋口 匡貴、石川 隆行、榊原 良太、有光 興記、澤田 匡人、湯川 進太郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 472
3. 書名 感情とウェルビーイング：感情心理学ハンドブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小林 正法  (KOBAYASHI Masanori)  (60723773)	山形大学・人文社会科学部・准教授   (11501)	
研究分担者	鈴木 紘子(中村紘子)  (NAKAMURA Hiroko)  (30521976)	東京電機大学・理工学部・日本学術振興会特別研究員(RPD)   (32657)	
研究分担者	大竹 恵子  (OTAKE Keiko)  (70405893)	関西学院大学・文学部・教授   (34504)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------